

アムスルだより

No.5 1994年 1月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875



アサヒガニの話

明けましておめでとうございます。
今回はお正月に縁起の良いアサヒガニについて紹介します。アサヒガニは全体が朝日のような朱色をしており、甲羅は縦長の楕円形で、その長さが13 cmほどになるやや大型のカニです。食用のカニですが、ふつうの魚屋さんではあまり見かけません。那覇空港や公設市場ではどちらかというと、本土からの観光客の土産向きに売られています。まだ一般的ではないので、食べたことのある人は少ないかも知れませんね。

アサヒガニは、房総半島以南の南日本に広く分布しており、ここ慶良間の海にも棲んでいます。さらに世界的にみると、アフリカ、オーストラリア、ハワイなどインド洋～太平洋の広い範囲に生息していることがわかります。彼らは一般に10m以深のきれいな砂地に棲み、泥っぽいところにはいません。普段は砂に潜って、目だけを砂の上に出しているため、ダイバーが見かけることもほとんどないと思います。

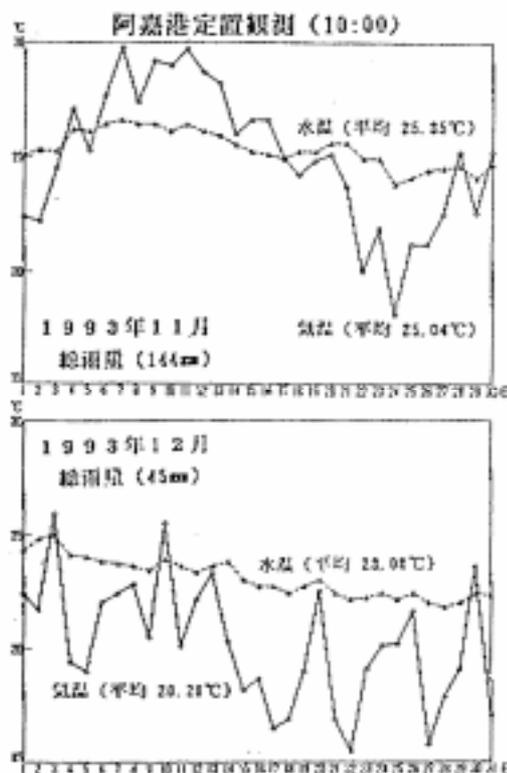
糸満の漁師が時々、慶良間近海にアサヒガニを捕りにきます。漁具は直径40 cmほどの針金の丸い枠に目合の大きな網を張ったもので、中央にカツオの頭などの餌をつけ、これを延縄式に数十枚つけて海底に沈めます。アサヒガニは餌のにおいを敏感に感じとり、砂から出て網の上に来てきます。すると綱に脚が絡まって取れなくなってしまふというわけです。餌を使ってカニを集めるので効率がよいのですが、乱獲になりやすいので注意が必要です。房総半島では漁業を始めてわずか2年で資源が枯渇したと聞きました。漁業が本格化する前に、産卵期を禁漁にする、漁具を改良して小さなカニが掛からないようにするなどの対策が必要だと思います。

アサヒガニの生態にはわからないことが数多くあります。たとえば、棲息場所の条件(きれいな砂地であってもどこにでもいるわけではありません)、餌、繁殖期、産卵回数、成長、寿命、外敵など。近年はアムスルをはじめ、いくつかの研究機関でアサヒガニの栽培漁業の試みがなされ、実験室で幼生を稚ガニになるまで飼育できるようになりました。しかし、実際の海中で幼生がどんな所にいるのかは全くわかつ

ていないのです。海の生き物の多くがそうですが、アサヒガニの幼生も、親とは似ても似つかない変わった形態をしています(右図)。頭の前後に長いトゲを持ち、そのトゲに赤い縞模様があります。幼生は7回も脱皮をして稚ガニになります。その間の約1ヶ月半、毎日、餌となるプランクトンを培養し、スポイトを使って幼生を傷つけないように水替えをするのは大変なことです。現在は、このように手間をかけないと飼育ができないため、大量に稚ガニを育てることは困難です。



将来、アサヒガニは慶良間の名物になるかもしれません。しかし、そのためには資源調査や種苗放流、漁業規制などを通して資源の管理をすることが不可欠でしょう。研究所でも、サンゴの研究の合間にアサヒガニの調査を続けていますが十分な時間がかかりません。棲息場所や生態など、何か情報がありましたら教えてください。また、調査に協力して頂ける方がいらっしゃいましたら研究所までご連絡くださいますようお願いいたします。



阿嘉島の海より -イカ釣り-

今年の夏以降降水不足に悩まされましたが、11月には144mmのまとまった雨が降りました。皆様も安心して新年を迎えられたことでしょう。しかし、12月以降少雨傾向が続き、まだ油断はできません。気温と水温は徐々に下がってきました。この寒い夜の海に、シロイカやアカイカを釣るため船を走らせたり、コブシメを突きに潜る方も

いらっしゃることでしょう。イカは刺身にしてとても美味しいですね。島ではお正月などのお祝いの席に欠かせません。これらのイカは今の時期、交接・産卵のため岸に近づくと言われています。3月10日発行予定の次号では、イカの産卵についてお話をします。今回紹介する予定でしたサンゴ幼生の行方については、また改めてご紹介します。今年も「アムスルだより」を通じて、島の人達に、研究所の活動や海の生物について紹介していきたいと思っております。本年もよろしくお願い致します。